



## 日本の貧困

日本の貧困について興味深い指摘があった。小論文にも使えそうなので引用しておこう。(WEB RONZA、石井光太氏の記事)

＊

日本における相対貧困とはどのような特色を持つものなのだろうか。

現在、日本における相対貧困層の基準は年収でいうと約122万円以下で、その割合は6人に1人になるといわれている。数にすれば、約2000万人に及ぶ。膨大な数であることは誰にでもわかるはずだ。だが、日本には途上国のような貧困者だけが集まって暮らすスラムというものがない。少なくとも、スラムという言葉が本来示す「不法占拠による住宅が密集した貧困街」というものはない。

では、日本において貧困者はどこに暮らしているのか。一言で表せば、都市に点在しているのだ。

東京を例にとって考えてみたい。東京23区の中で荒川区、北区、足立区といった地域は平均所得が低いといわれているが、なにも貧困者はメガスラムのようにそこだけに集まって暮らしているわけではない。高級マンションが集まり、比較的所得が高いといわれる千代田区や港区や中央区といった地域においても、家賃4、5万円台のアパートというのは存在し、そこにも相対貧困層と区分される人々が暮らしている。

なぜこうしたことが起こるのかといえば、日本では貧困者とはいえども最低賃金が定められていたり、福祉制度が適用されたりすることで、最低限度の生活が保障されているからだ。たとえば日本では失業して収入がゼロになっても、生活保護のような福祉制度によって住宅費用が支給される。地域によって異なるが、6畳1間の

風呂・トイレ付きのアパートに住むぐらいのお金は出る。こうなると彼らは空き地に勝手にバラックを建てて住み着く必要はなく町にある安いアパートに入居することになる。これが日本でスラムのような空間ができない主な要因だ。

ただし、この安いアパートは一つの地域だけに集まっているわけではなく、先ほど述べたように所得の低い地域であっても高い地域であっても存在する。この結果、貧困者が町のあらゆるところに点在し、姿が見えなくなってしまう。スラムのように一カ所に集まっていれば可視化されて、良くも悪くも社会の中で明確な存在になるが、日本では都市の中にまぎれこんでしまうことによって、不可視の存在になるのだ。これは貧困者の、「孤立化」という事態を生み出す。

たとえば、町の格安アパートに生活保護を受給している貧困者が住んでいたとしよう。四方を壁に仕切られた部屋で、仕事をせずに暮らしていれば、なかなか隣人と関わったり、よそに暮らす人々と接したりする機会はない。そうなると、アパートの部屋で貧困者は孤立してしまう。私自身の取材経験からいえば、高級住宅地の方がこうした孤立化の傾向は強い。ある程度の値段のするマンションに囲まれるようにしてポツンと安価なアパートがあったりすれば、貧困者はなかなか周囲のマンションの住人と関わりを持つことができない。また、貧困家庭の子供が学校へ行ったところで、クラスメートと所得格差がありすぎるために同じ遊びをすることができず、一人ぼっちになってしまうこともある。全員が全員ではないが、特に子供や老人といった社会的弱者が何かしらの形で孤立する可能性が高い。